

合格して胸上げされる受験生—佐賀大学



佐大フステツチ

合格発表 大学生生活 自立促す

本庄キャンパスの冬桜は花数は減ったものの三月初めの寒さに負けず、また花を付けている。その脇には彼岸桜が今を盛りと花を付けている。

三月六日、その花の近くにある大学会館前に本年度の大学入試合格者の受験番号が張り出された。私が大学に着いたのは午後三時。あたりはもう閑散としていたが、アメフト部の学生たちが集まっていた。入部の勧誘を終えたのかと思ったら、合格者の胸上げをしていらした。大きな体の部員に胸上げされた

合格者は空中で心からの万歳をしたことだろう。ちよつと会館から親子連れが出てきた。「おめでとうございませう」と話しかけた。聞くところ

岡の出身で、農学部合格したと女子高生はうれしそうに答える。「一人住まいをするの」と尋ねると「はい」と言ったが、そばにいたお母さんは「佐賀は近いので電車で通わせることも考えている」という。

福岡県出身者は合格者の40%。佐賀県は24%である。JRの人からこんな話を聞いたことを

ふと思い出した。「午前十時台と午後三時台の佐賀博多間の電車が満員になる。どうも博多付近から佐大生が、電車通学をしているようだ。最近の親の経済状況を反映していて、下宿させるより安くてすむという理由からではないか」という話であった。

わが家の場合は「金の切れ目は縁のつながり」という関係は残っていたものの、子どもたちの自立はわが家から離れての大学生生活から始まったように思う。そばにいたおとうさんは、終始黙って私たちの話を聞いていたが、あの親子、どのような決着をつけるのか。さて、残念ながら不合格であった若者たち。気を取り直して次の試験に向かつて準備を開始しているのだろうか。どちらにせよ、まだ先が長く、多様な選択をする機会をたくさん持っている若者たちに「頑張れ」とエールを送りたい。

その日、私を訪ねてきた知人が「大学に来ると気分が若返りますね」と言った。きつと、若者たちが醸し出す希望や夢へのエネルギーがキャンパスには満ちていたのかもしれない。

(佐賀大学理事・北島悦子)
※次回は25日付の予定です。